
足を曲げる～驚異の奇病、屈伸病～

ぬじゅわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

足を曲げる→驚異の奇病、屈伸病(→)

【Zコード】

Z2431M

【作者名】

ぬじゅわきし

【あらすじ】

感染すると脳髄が破壊され、永久に屈伸を続けてしまつ恐怖の奇病が発生！はたして原因は！人類の運命は！

ある日突然、人々の足が曲がりだした

物寂しい住宅街で高橋は一人でバーを経営していた。そんなに高級なバーではなかつたが、客はそこそこ集まっていた。夜12時に閉店した後彼はいつも一人で酒を飲んでいた。そしていつも店内に設置されてる防犯カメラのカセットを取り出してはテレビでそれを見て思い出に耽つていた。

そんな彼だがある夜の事、閉店間近に店の外から男女が口論していた。彼が何の口論だらうと耳を傾けた時には女は「あんたなんか、だいつきらい！」と捨て台詞を吐いて乱暴に店に入つて来た。男の方は後を追つたりせずにそのまま去つたようである。

その女性には見覚えがあった。高橋の店の常連客である。依然は力ップルで来たが別れたか、と高橋は思った。

女性はウイスキーを注文し、ついでに自棄食いなのか「何か食べる物ある？」と乱暴な口調で尋ねた。高橋は冷蔵庫を見て言った。

「ストロベリーパイならあるけど

「じゃあそれで。」

そして彼女はストロベリーパイを貪るように食べ、ウイスキーを飲んだ。その自暴自棄さ加減を見て高橋は気をつかつて彼女に言った。「あまり、飲みすぎない方がいいですよ。」

ことり。彼女はコップを置いた。そして軽く溜息をついて言った。

「そうですね。すみません。」

「大丈夫ですか。」

「大丈夫です…」

そして彼女は席を立つて礼を言った。

「ありがとうございました。」

「いえいえこちらこそ…」

「お礼は結構です。元はと言えば私が…」

彼女は突如口ごもつた。そのまま立っていたので高橋は尋ねた。

「どうされましたか？」

「元はと言えば私が…私が…」

「いいですよお客様さん。ほら、夜が更けますよ。」

「私が…私…たし…たし…た…」

「お客様さん？」

突然彼女はゆっくりと膝を曲げてしゃがみ、そして立ち上がった。靴を直しているのかなと高橋は思った。彼女は再び膝を曲げてしゃがみ、再び立ち上がった。そして再びその屈伸運動をした。

「お客様さん？」

高橋は彼女が酒で気分を悪くしたと思って、肩を掴んで安定させて介抱しようと思ったが、勢い余って彼女を仰向けに倒してしまった。がしゃんがしゃんと椅子が倒れた。

「申し訳ございませ…」

と高橋は言いかけて口ごもつた。彼女は仰向けに倒れたまま無表情で屈伸運動を繰り返していた。「お客様さん！お客様さん！」と呼び掛けても返事がない。つまり屈伸したまま意識がない。

すぐさま高橋は救急車に連絡しようと電話に向かい、番号を入力した。だがその時ショーウィンドウから見えた光景に彼は驚愕した。色とりどりの街灯に照らされた夜道に無数の人々が屈伸していたのだ。

「…しもし、もしもし…」

高橋は電話の声に気付き、「あ、はい、もしもし！」と答えて要件を伝えようとした。

だがその時高橋は異変を感じた。突然思考停止したのだ。そして膝の力が抜け、足ががくがくした。彼は机に掴まって、受話器を取り落とした。だが脚の麻痺で思わず転んでしまった。右に左に揺れる受話器から「もしもし、もしもし！大丈夫ですか？」と救急隊が懸命に呼び掛けたが彼は何も言えずにうつ伏せで屈伸し続けていた。

人々が次々と屈伸をし続ける・・・

「ニュースです。月並区で突如住民が屈伸を繰り返すと言つ異常な現象が発生しました。原因は判明せず、現在調査中です。」

「ニュースです。政府は“屈伸現象”に対し、対策のため臨時に『屈伸現象調査委員会（Bending Syndrome Investigation Committee=BASIC）』を設立したと発表しました。」

「ニュースです。月並区で発生した“屈伸現象”それが軒並区にも発生しているとの報告が入りました。これに対し牛山首相は『調査は続いている。是非報告を期待している。』とコメントしました。」

「ニュースです。BASICから“屈伸現象”的原因是ウイルスであるとの報告が入りました。委員会はこれを仮に“Bウイルス”と名付けました。」

屈伸現象対策委員会、通称BASICに相田は勤めていた。医科大卒業してまもなく、政府から急募と言う事で至急参加したのである。そんな彼だが、ある日上司の田中委員長から呼び出しがかかった。

「…何でしょうか…」

「君がここに入る時私が研修を受けただろう?」「はい…」

「今度は君が新入りを教えてくれ。」

「冗談じゃありません!」

とつさに相田は大声で否定したが、すぐにそれを打ち消した。
「…すみません…でも、私は、ここに勤めてまだ一週間も経っていません…」

「当たり前だ。この組織も一週間も経っていない。だが、事態は急を要する。できるだけ多く優秀なメンバーが欲しいのだ。分かつて

くれ。」

「…分かりました。」

そしてBSIC本部に新人の女性が来た。

「初めまして、瑠田柳子です。」

「よろしく。相田小見郎です。案内しますね…」

相田と瑠田は先を歩いた。やがて一人は「投射観察室」と言う部屋に入った。

そこは緑色で薄暗い部屋で中央に堅いベッドのような台があった。相田はリモコンを握つて言つた。

「まず早速ですが、患者の体を見て頂きましょう。」

そう言つて相田がリモコンを押すと、ベッドから突如仰向けの人間が現れた。屈伸していた。瑠田は尋ねた。

「…大丈夫なんですか？うつつたりしないんですか？」

「大丈夫。これはホログラムです。触つてご覧なさい。」

相田の言われるままに瑠田は触ると、彼女の手が患者の身体を突き抜けた。

「わっ！」

「これぞBSICの科学、3Dスキャナーです。実は患者を収容している隔離ボツドにスキャナーがありまして、そこからデータを受けていります。」

「どういう仕組みですか？」

「簡単です。レントゲン撮影やMRIと同じで、透過ビームを患者の全身に当て続ける。そしてそれの反応をコンピューターが解析しホログラムで再現します。これにより手術を減らして患者の負担が減らせます。」

「へええ。」

「まあ雑談はともかく、患者の体を観察してみましょう。筋肉から。」

「

そう言つて相田はリモコンに何事か入力した。すると患者の皮膚が消えて筋肉が顯になつた。脚の筋肉は収縮と弛緩を繰り返して屈伸運動を造り上げていた。相田は言つた。

「次に循環器」

次に患者は血管だけになつた。脚の屈伸している部位が周期的に細くなつて血流が悪くなつてているのを瑠田が発見して声を上げた。

「あつ！」

「そうです。よく気付きましたね。つまり脚が周期的に麻痺したような状態になつて、それが屈伸を手伝つている。最後は神経を見てみます。」

患者は神経だけになつた。

「脳を御覧下さい。」

瑠田は患者の脳を見て、あつと声を上げた。脳のあちこちに砂のような灰色の斑点が見える。

「ではこの脳の断面を見てみます。」

ホログラムは脳を拡大して、それをスパッと切つて断面図を示した。瑠田はその断面を見て悲鳴を上げた。脳は内部から灰色の謎の物体に侵食されていたのである。

「これは・・・」

「おそらくウイルスが脳の一部、脳髄を変質させたのでしょうか。」「でも・・・そんな・・・」

「つまり、我々はそんな恐ろしいウイルスを相手にしているのです。」

「・・・・・」

画像は再び患者の元の体を映し出した。患者はホログラム台のベッドに仰向けのまま、無表情に天を見つめて屈伸していた。やがて相田が通信を切つたため患者は消滅した。

「次行きましょう。」

調査。人々が見た、屈伸の現場とは・・・

「ニュースです。月並区で発生した屈伸現象、それが、そこから離れた逆波区でも発生しました。BSJCの田中委員長は『前代未聞の事態だ。だが現在調査隊を向かわしている。』とコメント。」

トラックの中には調査隊らが乗つており、彼らの中には相田や瑠田がいた。調査隊の中のリーダー幕田が皆に言った。

「これは訓練ではない。現実だ。少しの油断が危険を伴う。通常、屈伸と言うのはただのストレッチ運動だが、今、これから向かう先では屈伸は死を意味する。それを意識して注意深く行動するように。」

「

そして一行は目的地に着いた。皆トラックを出て機材を運びながら前方を進んだ。そこは高層ビルが群がる大都会であった。いつもなら車の音が聞こえるはずだが、今日はやけに静かで、それが晴れた空と相反して不気味だった。

何台かの車が衝突事故を起こして潰れていた。おそらく運転手が運転中に急に屈伸したとして、それで急にアクセルを踏んで事故を起したのだろう。

一行は先を歩いた。街の至る所に人々が屈伸していた。買い物中でバッグを右手にぶら下げたまま屈伸しているO・J・達とか、ベンチに横たわりながら屈伸している飲んだくれとか、カウンター席で店員と客が向かい合って屈伸したり、その客の後ろに屈伸の行列ができたりしていた。瑠田が相田に言った。

「不気味な光景ですね。」

「そうですね。僕も何度見ても慣れないです。」

やがて一行は先を歩いた。そして歩行者専用道路にたどり着いた時、

リーダーの幕田が立ち止まつた。

「幕田隊長、どうしたのですか？」

「…見る…」

幕田隊長が指を指した。その先を見て調査隊達は物も言えず息を呑んだ。

「なんという…」

歩行者専用道路にはびっしりと人が密集しており、それぞれが直立したまま屈伸を繰り返していた。勿論速さには個人差があるので、皆が同じタイミングで屈伸したわけではなく、まるでもぐら叩きのようにばらばらと屈伸していた。彼らは皆無表情で黙々と屈伸していた。隊員の誰かが「大丈夫ですか?」と聞くが反応しない。その時幕田が言つた。

「こいつらはまだ新しい。感染源は別にあるはずだ。進もう。」

そして一行は屈伸人間達をかき分けて前を進んだ。瑠田はふと疑問に思つて質問した。

「幕田隊長、どうして彼らはまだ新しいと分かるんですか?」

「それは彼らが健康的だからだ。」

「つまり?」

「我々は通報を受けた後なので、発生してから今は随分経つてゐる。おそらく半日から一日ほどだろう。ならば考えて頂きたいのだが、それほど長い間飲まず食わずに屈伸するどどうなるかな?」

「かなりやつれますね。」

「正解。だから傾向として人々の健康を見ればいい。まあそれだけでは感染分布地図は書けないが調査においては非常に重要だ。」

そして一行はビルの奥地へと向かつた。至る所、ビルの上から下水道まで人々が屈伸していた。だんだん人々がやがてやつれているのを相田などの隊員達は目撃した。隊長の幕田は言つた。

「気をつけろよ…濃密に屈伸の空気が溢れている。」

その時一人の隊員木中がコンクリートの破片からつまづいてどたり

と転んだ。幕田は怒鳴った。

「馬鹿野郎！」

「すいません…わあ！」

幕田が不審な悲鳴を上げたので隊員達が一斉に彼を見た。転んだ際にコンクリートの破片が防護服を擦り、腕の部分に穴が開いてしまつたのだ。

「空気が浸入した！わああ！」

「声を出すな！呼吸してしまうだろ！？」

「すでに吸ってしまいました！あ、あああ！膝が！」

木中の膝は屈伸せんとがくがく揺れだした。木中は恐怖を感じて叫んだ。

「隊長！」

「えいくそ！」

幕田隊長は木中の両足を力の限り踏みつけ、脇の下から両腕で上半身を固定した。無理矢理だが足を屈伸させる事なく伸ばすためである。幕田は叫んだ。

「早く！救護ポッドの準備を！」

その時木中の表情が歪み出した事に幕田は気付いた。同時に木中の脚が屈伸しようと力を入れてる事に、踏みつけた脚から感じた。木中は苦しんでいた。それは痛みではなく、激しい不快感であった。そのあまりの苦しみに木中は早く屈伸させてくれ、楽にしてくれと懇願の目を幕田に向けた。俺はこのまま苦しみながら行き続けるのは嫌だ、屈伸したいんだ、この苦しみから解放させてくれ。無言の彼のメッセージが幕田隊長に届いた時、幕田は衝撃を感じた。そして踏みつけた足を離した。足がびょんと上がった途端たちまち木中は無表情になり、幕田に上半身を持ち上げられたまま、宙で屈伸した。幕田は彼をゆっくり地面に降ろして屈伸する彼に対して合掌した。

そして前進した。徐々に入々の中にやつれた人々を見るようになつた。もうすぐ感染源に辿り着けるか。そう思いながら、又屈伸して

しまつた木中の事を思い馳せながら前進した。よく見ると人間だけ屈伸している訳ではなく、蝶やみみずも等しく屈伸し、犬猫はお座りと立ちをしきりに繰り返していた

その時。

がしゃんがしゃんじょん。

街の隅のゴミ箱から激しい物音が聞こえた。何事かと調査隊は注視した。しばらくするとヤニから…

「助けて下さい！」

なんと生存者がいた。素肌を晒して。調査隊は皆驚いた。幕田隊長は生存者の彼に尋ねた。

「名前は…」

「真田俊夫です。」

「真田さん、どうしてここに？」

「実は、突然みんな屈伸しだしたんで隠れてたんですが、ニュースで調査隊の話を聞いたので助けて欲しくて…」

「なるほど、膝に何か不快感を感じますか？」

「いいえ。」

幕田隊長は希望を感じた。彼は免疫を持っているのかもしれない。

「では採血して頂いてもいいですか？」

その時真田は非常に嫌そうな表情でしたが、逆らう事は立場上できないだろう、と判断し答えた。

「痛くしないで下さいね。」

注射嫌いなのだなと思いながら幕田隊長は採血した。そして安全のため彼は付き添いの隊員と、木中のために用意されていたポッドに隔離された。

その後ポッドを乗せたトラックはBSI本部へと向かつた。

生存者、そして異変。

無事に救出された真田はBSHCに運ばれ厳密な診察を受けた。その結果、彼は保菌者と認定された。かくして彼は隔離生活を余儀なくされた。毎日一度抗ウイルス剤を打たれ、テレビと新聞と電子書籍、常に孤独で、その上会話は窓に仕切られながらされた。まるで囚人がモルモットだと最初彼は怒りを露にしたが、やがて落ち着いた。だがやはり寂しいのかよく窓の外の研究員に話しかけていた。ある日、彼は切迫した声でそばにいた相田に言った。

「彼女は、彼女は無事ですか？」

「彼女？お名前は？」

「矢幡端子、やはたはたこです。月並区のバーの前で喧嘩別れしてしまったんです…彼女はどうでしょうか？」

「調べます…矢幡、矢幡…」

相田はリスト帳を取り出してしばらく探していた。そしてあるページを開くと相田はそのまま静止した。そして尋ねた。

「そのバーは行き付けですか？」

「あ、はい。高橋さんと言うバーテンダーだけが働いている…」

「高橋…」

「…どうしたんですか？」

相田はリスト帳を閉じて言った。

「矢幡さんですが…」

「はい。」

「…彼女は、既に…屈伸しておられます。」

「…?」

「お悔やみ申し上げま…」

「嘘だ！」

「?」

「嘘だ！彼女が屈伸したなんてそんな…まさに屈辱だ！屈伸の屈辱

だ！ああああ！」

真田は叫び続けた。その声は狭い隔離室からマイクで拾われ、どこまでも響いた。やがて落ち着いた真田は、ぼそりと言った。

「彼女に会わせて下さい…」

「え？でも…」

「屈伸してようといまいと、彼女に、会いたい…」

念のため真田は防護服を着けて相田と月並区へ向かった。ここは以前の逆波区よりもさらに進行しているためか、人々がげつそりやつれながら屈伸をしていた。

「まるで地獄絵図だな…」

と相田は呟いた。道を覚えているのか真田は先へ急ぎ、後を追つた。

そして屈伸する人々をかきわけ、ついに、あのバーへと辿り着いた。

バーの扉を開けると、バーテンダーの高橋がうつ伏せで弱々しく屈伸しているのが見えた。そしてその後ろには…

「端子！」

真田はかろうじて屈伸している矢幡端子に近づき、そのまま腰がぬけて崩れ落ちた。

「どうしてなんだ！端子！」

そう嘆き悲しむ真田をよそに相田は周りを見渡していた。ふと、バーの天井に監視カメラを発見した。カメラはすでに停止して作動していない。ひょっとして事件当時の様子が映されてるかもしねれない、そう考えて、相田はカメラを回収した。

帰りの際もトラック内で真田に聞かれた。

「そのカメラはなんですか？」

「バーにあつたカメラ。」

「ふりつぶ…」

そうして一人はBSICOに帰り着いた。相田は早速消毒済みのビート才を見始めた…

「ちょっとちょっと。」

「どうしたの?」

「これ。」

それから少し後、BSICOで三人の研究員は得体のしれない青い液体が密封されているビンを発見した。

「何この液体…」

「なんかさっき送り届けられたみたいだけど…」

「なにな…反免疫薬!?」

「何それ?」

「体のあらゆる免疫機能を破壊する薬。」

「なにそれ。せっかく真田さんから血清作ろつとつしてたのに誰頼んだの?ねえ、牧中ちゃん。」

牧中と呼ばれたその研究員はなぜか無口で恐怖に怯えたように地面を見つめていた。膝が震えていた。

「どうしたの牧中ちゃん、気分悪いの?」

牧中は突然壁の手すりに駆けよつてそれに捕まつた。彼女は苦しそうな表情をしていた。足が力が入らないかのようにふにゃふにゃしていた。

「牧中ちゃん?」

耐えきれず、彼女は手すりから手を滑り外してしまつた。そのまま彼女は屈伸し始めた。

「そんな…まさか…」

「ここのBSICOで…くあつ…」

「優山くん！ん？わあっ！」

残った二人も屈伸をし始めた。

それを目撃したある研究員が非常ベルを押し、そのまま屈伸した。

かくしてBSIC内にベルが鳴り響く。

そして真相

ブザーを聞いて相田はやはりと察した。彼は急いで緊急マスクを装着し、荷物を持つて先を急いだ。途中あたふたしている瑠田を発見し相田は予備で持っていたマスクで「早くつける!」「とつけさせた。瑠田は「私少し吸ったかもしれない」と不安そうに言つた。相田はロビーへと向かつた。すでに四人屈伸している。相田はそこに置いてある青い瓶、「反免疫薬」を取り出してバッグに入れた。

相田は真田の部屋へと向かつた。彼の部屋の前は研究室である。いつもは彼の部屋には窓があるが、今日はシャッターが閉まっている。相田はそこのマスクをしている研究員に尋ねた。

「真田はどうしてる?」

「今、昼寝中ですが……」

「シャッターを開けて。」

「あ、はい……」

シャッターを開けた。そこには真田はいなかつた。

「あれ? あつ!」

よく見ると扉が破られていた。

「これは……さらわれたのか?」

「いや……ちがう……これは……」

相田の脳内で、ある記憶が回り始めた……

*

相田は月並区のバーから持ち帰ったビデオカメラを巻き戻していた。あの感染発生当時の様子が見えないかと探っていたのだ。だが何度再生しても矢幡は立ちながら、バー・テンドラーの高橋はうつ伏せで屈

伸を繰り返していた。むしゃくしゃしながらも相田は巻き戻し続けた。

ある時再生してみると、高橋と矢幡が会話をしている映像を発見した。

「何か食べる物ある？」

「ストロベリー・パイならあるけど」

「じゃあそれで。」

相田は先をみようと、早送りボタンを押そうとした。だが、誤つて巻き戻してしまい相田は「くそっ」と悪態をつき再生させた。まあ感染発生まで気長に観ようと相田は腹を括った。

ディスプレイ内で高橋は相変わらずグラスを磨いている。そのうち、バーの外から男女の喧嘩が聞こえて来た。一人は矢幡端子、もう一人は…真田俊一だ。そう言えば、感染発生の直前に彼女と喧嘩したって真田から聞いたな、と相田は思い出した。

高橋は彼らの喧嘩には気にも止めてないようであった。だが声は聞こえる。

「…うして？ うして？ なに考えてるの？ 俊ちゃん。」

「君は世界が屈伸する光景を見たくないのか？」

「いや！」

「そうか。じゃ あお前もワクチンを『え』ない。だからもう手遅れだ。今、僕はリモコンでウイルスを巻いたからな…」

相田は驚愕した。唯一の生存者、真田はまさか…

「あんたなんか、だいっきらい！」

そう言つて矢幡は高橋のバーに入ってきた。

相田は確信した。黒幕は…

*

「…真田です。無害を装つて自力で脱出して自ら感染源となつたのです。」

と相田が研究員に言った。その時瑠田が疑問を発した。

「え？でもなんで…」

「わからない。だが食い止めなければ、血清はできたのですね？」

と尋ねると研究員は答えた。

「はい。好きなだけどうぞ…」

そして相田は血清の瓶と反免疫薬の瓶を持つて瑠田と共に真田を追い始めた。

終わりへ

街で悲鳴が上がる。三度発生したウイルス災害により人々が屈伸に満ち満ちていた。「コースが流れる。

「臨時コースです！今度はBSHIC本部で発生！状況は不明！」

「いやあ、本部で発生とは、人為的なものじやないですかねえ。」

ある番組ではその二コースをパネラーが感想を言っていた。

「つまり、月並区から、離れて逆波区、ついに本部…この経緯を探ると人為的な物を感じますね。」

「では坂中さんは誰だと思いますか？BSHIC委員長田中ですか？」

「いや、だからこの経緯を探れば分かる話だ。犯人は…」

「犯人は？」

「犯人は…犯人…はん…にん…」

「坂中さん？」

「はん…に…は…」

「坂な…大変だ…皆逃げろ…早く…にげ…に…」

「放送は中止だ！わっ…」

「もう、いや！やめて！もう…やめ…て…や…」

カメラがひっくり返った。カメラには屈伸しているカメラマンを写し出していた。だれもその放送を止めようとしなかった。何故なら皆屈伸しているから。

*

相田と瑠田はBSHICを出て必死に真田の後を追つた。真田ははるか遠くにいる。途中運動不足の瑠田が「もう走れない…」と言ったため、相田は瑠田を背中におんぶした。相田はふと、瑠田がマスク

をつける前に一瞬空気を吸ったかもと言ひ言葉を思い出した。それで心配になつて彼女を連れていたのだ。相田は不安になつて尋ねた。

「瑠田さん、膝は大丈夫?」

「疲れてるだけです。」

「…」

瑠田を抱えながら相田は後を追つた。真田はある建物の前に立ち止まつた。相田は後を追う。

その時瑠田が「あっ」と言う声を洩らし、相田はぎくりとした。彼女の膝が周期的な痙攣のような運動をしているのを相田は感じた。その時相田は重大なミスを悟つた。事前に血清を打つべきであつた。真田の事で頭が一杯だつたのだ。瑠田は恐怖に怯えて叫んだ。

「屈伸しちゃう、屈伸しちゃう、屈伸!」

相田は手遅れかなと思いつつ瑠田を地面に横たえて今更血清を打つた。瑠田は不安そうな顔で相田を見上げて言つた。

「大丈夫かな?」

「…」

正直大丈夫である自信は相田にはなかつた。とりあえず一度屈伸すると完全に脳が壊れてしまつので、応急措置として、膝と足にコンクリートブロックを積んだ。

「じゃあ…ブロックどけないでね。屈伸は絶対しちゃダメだよ。」

「うん……ん?く…くああ!」

瑠田が苦しみ始めた。ウイルスに侵されつつある彼女の脳は屈伸を命じ、それが重石のせいで屈伸ができる苦痛と、脚の痛み。だが相田はいかなくてはならない。相田は屈伸に苦しむ瑠田を一瞥し、やがて後ろを振り返つて真田の建物へと向かつた。

建物は恐らく真田の自宅か仕事場であろう。様々な機械が並んでいた。中には開発中のあの次世代レントゲンの、3Dスキヤナーもあつた。なに、発明したのは彼だったのか…

そして、真田の後ろ姿を発見した。

「真田！やめろ！」

すると真田は不気味な笑いを浮かべて振り返った。そして言った。

「とうとう来ましたか。御覧下さい、この機械達を。実はこれらの技術は私が発明したのに政府に全て盗まれた。」

「…」

相田は沈黙した。研修中の瑠田に見せたあれは、彼の発明だったのか。真田は続けた。

「私は屈辱を受けた。だから仕返しに政府に屈辱をお返ししようと思い立つた。屈辱… そうさ…『屈』伸で『辱』しめる。そこで私はウイルス兵器を作った。もちろん自分には免疫がきくようにした。」

「…」

「だが付き合っていた矢幡に勘づかれた。復讐の邪魔になると思って私は矢幡を月並区で処分した。つぎに貴様ら BSTIC に行き着くよう生存者のふりをして自ら捕まつた。」

「…」

相田は背中の後ろ、真田に見えないように青い瓶を取り出した。

「だが不安だつた。矢幡は本当に屈伸したのか。へたすれば彼女のせいでの台無しになる。それで貴様と一緒に再び月並区に向かつた。確かに彼女は屈伸していたが、バーのカメラに気づかれたのは不覚だつた。」

「…」

相田はその液体を注射器につぎこんだ。

「そこで計画を今日に移した。昼寝するからシャッターを閉めてくれ、と言い、その間金属定規で扉を壊した。そしてここだ。」

相田は周りの機械を見渡した。一個一組のディスプレイが沢山あり、一方はミサイルのような映像、もう一方は各国の都市を写し出していた。そして相田はリモコンスイッチを掲げて見せた。

「これを押せば、ウイルスを乗せたミサイルが世界のあちこちに衝

突し、世界中の人物が屈伸する。もちろん、世界は崩壊する。だから私はためらつていい。そこで相田さんに聞きたいが、私はこのスイッチを押すべきかな？」

相田は注射器を背後に隠し持ちながら考え込み、答えた。

「…押すべきだと思う。だが条件が。」

「…何だ？」

「これだ！」

相田は注射器を高速で放った。注射器は真田の膝に命中し、リモコンを落とした。

「…！」、これは…

「反免疫薬。まずお前が屈伸しろ！」

真田の顔は一気に青ざめた。自分の身体にふりかかる恐怖で彼は「つつつつわっ！」と叫びながら後退りした。やがて膝が震え始めたので真田は機械の一つに掴まつた。そして膝に「やめろ…やめろお！私はまだ屈伸したくない、まだ屈伸したくないんだ！」と叫んだ。足元にリモコンが落ちていた。こうなつたら、屈伸しなばもろともトリモコンを拾おうとした。だが、拾う時誤つて膝を曲げてしまつた。彼の意識は破壊され、そのまま屈伸し続けた。

*

その後復旧運動が進められた。なにせ古泉首相や、安倍川官房長官などの政治家が殆ど屈伸してしまつたため、政治が崩壊してしまつたため、他国と助け合いつつ、復旧は進められた。

瑠田は退院した。

「あ、瑠田さん、退院おめでとうござります。」

「あ、はい。相田さん、助けていただきありがとうございました。」

「体の調子はどう？」「

「…」

突然彼女の表情は曇り、黙つたため相田が尋ねた。

「瑠田さん?」

そして彼女は屈伸した。相田はフラッシュバックして叫んだ。

「瑠田さん!」

だが彼女は立ち上がると普通に話しお出した。

「…すみません。後遺症はありました。いつも膝が微妙な痙攣で屈伸したがっているのです。それは理性で耐えているのですが、時折、屈伸が理性を打ち勝つて今のように屈伸してしまいます。」

「そうですか…」

「おかげでデスクワークに少し支障が来てしました。椅子に座ると、思考が抜けていつの間にか立ち上がってしまふのです。ですから私は座らない職業を今探しています…」

「そうですか…」

「まあ大丈夫です。これも何かの運命です。気にしないで下さい。」

そうして二人は別れた。

相田は瑠田の事を考えた。可哀想に、彼女は家でもどこでも座るたびに、いつの間にか立ち上がってしまふ事に苦しんでいるのだろう。会話するとき脈絡なく屈伸する癖にも苦しんでいるのだろう。

彼は家に着いて、あの時早めに血清を打たなかつた自分のせいだと思い独り泣いた。その後、彼は償いがしたいと思い瑠田に電話をかけた。彼女は電話に出た。

「もしもし」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2431m/>

足を曲げる～驚異の奇病、屈伸病～

2010年10月9日22時38分発行